牛群検定通信　No131

～検定成績表の新しい活用方法～

皆さんは検定成績表をどのように活用していますか？

検定終了後、送付されて来た検定成績表の数値を見て、飼料給与や飼養管理の不具合を改善していく、という使い方をされている方がほとんどだと思います。しかしながら、それで本当に良いのでしょうか？

牛群検定を行ってから検定成績表が戻ってくるまで、どんなに早くても３日通常は５日～７日位かかりますが、それまでの間、何もしなくて良いのでしょうか。例えば、乳量が多く乳成分値が明らかに低い牛に対して、検定成績表を見てから飼料を増やすようでは、手遅れではありませんか。また、初回検定で乳脂肪が５％を超えるような牛は、体脂肪を動員していて脂肪肝になり、酷い場合にはケトーシスになっているわけですが、そのような牛を１週間も手当てしないでおいて良いものでしょうか。

これは、検定成績表の数値を見てから行動を起こすといった活用法に慣れているために起こる弊害で、実際の牛の状況とタイムラグが発生し対策が遅れるため牛の健康状態を損ない、生産性を低下させる原因にもなります。

このような状況にならないためには、今までの飼養管理状況を詳細に検討し問題点を洗い出し、その改善策を先に実施し、その対策が功を奏しているかどうかを検定成績で確認する、といった考え方が必要です。検定成績が順調であれば、対策が功を奏しているわけですし、検定成績が思ったとおりになっていなければ対策が不十分であったことが分かりますので、更なる対策を行わなければなりません。しかしながら、その場合でも検定成績を見てから対策を行うのとはスピード感がまるで違いますので、牛の健康を損なう度合いが違い、生産性の低下は少なくて済みます。

検定成績表を見てから対策を行うのではなく、対策を行った成果を検定成績表で確認する、といった検定成績表の活用法を是非試してください。牛を飼うことがきっと面白くなってくるはずです。

・暑熱対策

この時期に暑熱対策、「え？」と思った方がほとんどだと思います。乳牛が暑熱の影響を受けるのは２８℃を超えてから、ということが昔からいわれており、教科書にも記載されていましたが、それはいつの時代の話でしょうか。他の酪農国に比べ湿度が非常に高い日本では、気温が他の国よりも低温で暑熱の影響が出始める傾向があります。実際に日本で行われた研究では、平均気温が２０℃を超えると体温や呼吸数が増加しはじめ、採食量や乳量が低下し始めるといった結果が出ています。ですから、２８℃ではなく、２０℃を目安に暑熱対策を考えなくてはなりません。

日本は南北に長く地域によって大きく気温が異なります。九州や西日本ではお彼岸の頃には例年２０℃を超える日がありますし、地球温暖化の影響もあってか、年によっては３０℃近くなる日もあります。検定成績表では検定日気象情報を記載しており、あなたの住所の最も近いアメダスの平均気温、最高気温や最低気温などが分かるようになっています（牛群検定気象情報カウダス）。これらのデータを活用して、早め早めの暑熱対策が必要です。

2021 年 3 月家畜改良事業団情報分析センター